

令和7年度 立川市立立川第六中学校 学力調査等の分析〔各教科〕

教科	教科の現状と課題 <全国学力学習状況調査や定期考査等からの分析>
国語	<p>○学力調査の結果から9割弱の生徒が「授業が分かる」と回答している。「よく分かる」と回答した生徒は、都・全国平均ともに5ポイントほど上回った。「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」については、「とてもそう思う」と答えた生徒が都平均を15ポイントほど上回った。引き続き意義を感じさせながら取り組ませたい。</p> <p>○「知識・技能」については都・全国平均ともに下回った。「思考・判断・表現」は、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことすべてにおいて上回ったが、言葉に使い方について丁寧に指導する必要がある。</p>
社会	<p>○全学年を通して、用語等の知識の定着が見られた。その一方で、文章で説明したり、資料から比較や分析をしたりすることが苦手である生徒が多い。また、「歴史」「地理」「公民」全ての分野において、自分の力で事象を関連付けて問題解決に向かうことも苦手である。思考力等が求められる問題の正答率も低い傾向にある。</p> <p>○特に歴史的分野において、理由や背景等を踏まえながら、歴史的な事象について深く探究し、文章にまとめることに苦手意識がある傾向にある。時代の流れを捉えながら学習するために、資料等を丹念に読み取り、関連付ける学習活動を丁寧に行う必要がある。</p>
数学	<p>○本校では全国データ、都データのどちらと比較しても、正答数1～3問の生徒の割合が低いため、基礎クラスにおいて基礎的な学習内容の定着が見られる。</p> <p>○【生徒質問】において、「わからないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」に対して、85%の生徒が当てはまる・どちらかといえば当てはまると答えていた。これは全国よりも9%ほど高く、粘り強く学習に取り組む力が身に付いているといえる。</p>
理科	<p>○定期考査や全国学力調査の解答の傾向として、基本的な知識は身に付けているが、グラフや表から判断する記述式の設問については苦手な生徒が多い。グラフや表から必要な情報等を読み解く力を育成していく。</p> <p>○「観察や実験をよく行っている」と感じている生徒が90.5%おり、「観察や実験を通して調べていく中で、自分や友達の学びが深まった」と感じている生徒が70.3%と多いことから、今後も継続していく。</p>
音楽	<p>○定期考査の正解率が低いのは、全学年とも音符や休符の名前と長さの割合の問題であった。繰り返し授業で確認することで音符や休符に対する苦手意識を克服させる必要がある。</p> <p>○授業評価の結果から、その日に「何を学ぶのか」目標をもって取り組めていない生徒が1年生は30%、2年生は29%、3年生は20%いたため、毎時間の授業の目標やめあてをしっかりと提示した上で授業を進め、振り返りを丁寧に行うことで次回への意欲がもてるよう指導していきたい。</p>
美術	<p>○美術科の1学期期末考査の平均達成度は各学年平均50%であった。問題が難しかったという意見も多いので、観点ごとのバランスや出題形式等を再考していく。</p> <p>○作品完成に向けた作業には個人差がある。アイデアを具現化出来ない、どのように取り組んでよいのかわからない等、なかなか作業が進まない生徒への支援を工夫する必要がある。</p>
保健体育	<p>○東京都体力・運動能力、運動習慣等調査では、持久走とハンドボール投げの記録が低い傾向があるので、全身持久的な運動や、投げる運動を、単元と関連させながら取り入れていくようにする。</p> <p>○生徒の授業評価で、約15%の生徒がと課題としてあげている項目が、「評価方法を十分に理解していない」「振り返りを十分に行っていない」「ICTの活用が少ない」であった。授業の目標・流れの提示とともに振り返りの場や時間の確保、評価についての理解を深めるルーブリックの活用、知識や技能の習得につなげるICTの効果的な活用を工夫していく。</p>
技術家庭	<p>○技術科の1学期期末考査の平均達成度は1年52%、2年62%、3年58%であった。学年によって知識の定着に差があるので、授業内での復習の機会を増やすことで学年間の差を縮める必要がある。</p> <p>○家庭科の1学期期末考査の平均達成度は1年45%、2年49%、3年66%であった。習得した知識を活用できるよう、実生活に即した授業を展開できるようにする。</p>
外国語	<p>○令和7年度1学期期末考査で正答率20%未満の生徒の割合が、3年生は8.8%、2年生は4.0%、1年生は6.8%だった。年間を通して、各定期考査達正答率20%未満が10%以下となることを目指す。</p> <p>○生徒の授業評価から、「授業がわかる」と回答している生徒は、全学年共通して90%を超えているが、英単語や文法などの知識を十分に定着させたり、既習事項を活用して英語で表現したりすることを苦手とする生徒が多い。知識の定着のため、繰り返し学習する帯学習の時間を、授業中に設けて反復練習を積む。</p>

令和7年度 立川市立立川第六中学校 学力調査等の分析〔六中全体〕

学力向上推進委員会による六中全体の分析

分析結果

〈教師との関係〉

「困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか。」という点で、「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」の合計が、全国平均よりも6.8%多い80.0%と高かった。また、「自分にはよいところがあると思っている生徒」が87%おり、「先生は、よいところを認めてくれていると思っている生徒」が91.3%いることから、生徒にとって教員は安心して頼ることができ、自分を見てくれていると感じていることがわかる。

〈各教科〉

「国語が好きな生徒」が全国に比べ4.7%多い62.6%に達していたが、「理科が好きな生徒」は全国に比べ12.6%少ない50.4%であった。授業がわかりやすいと感じている生徒は、全国に比べ「国語」は5.6%多い82.6%、「数学」は8.8%多い79.1%であった。これらのことから、平均正答率が全国に比べて「国語」が2.7%高い57.0%、「数学」が1.7%高い55.0%だったのに比べ、「理科」は全国平均とほぼ同じという結果につながった可能性が考えられる。

〈家庭の学習状況〉

「平日の学校の授業外に2時間以上勉強に取り組む生徒」は、全国に比べ8.3%上回る39.1%ではあったが、「30分より少ない生徒」も20%いた。また、「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、勉強に取り組む時間が1時間以下の生徒」も47.9%存在している。これらのことから、4月の段階では家庭学習が定着していない生徒が多かったということがわかる。

ただし、「読書が好きな生徒」は70.4%、「学校以外で平日に読書をする生徒」が67%と全国平均よりも高く、読書をする習慣は生徒に定着しているといえる。

今後の計画

わからない問題への粘り強さや、自分の考えを深めたり話し合ったりする活動へ積極的に取り組む姿勢がみられる(82.6%)ように、学習意欲が高いことは本校の生徒の傾向である。各教科の現状と課題においては、ICT機器の使用した授業が全国よりも少ないため、効果的に用いることで課題解決学習への楽しさを様々な教科の中で感じられるようにし、より主体的に学習する力を向上させていく。

さらに、これまで通り、学習内容の基礎・基本を身に付けさせていくことが重要である。そのためにも教師との信頼関係を築きながら、スタディールームや夏季補充教室のように、自主的な学習を補助する機会を継続して設けていく。思考力・判断力・表現力の育成のためには、学習意欲や学習内容の基礎・基本が土台となる。今後も、以上のことに力を入れ指導にあたる。